

氏 名	ないとうまほ 内 藤 真 帆
学位(専攻分野)	博 士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 415 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 共 生 文 明 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	ツツバ語の記述的研究

論文調査委員 (主査) 教 授 三 谷 恵 子 教 授 大 木 充 教 授 梶 茂 樹

論 文 内 容 の 要 旨

本博士学位申請論文は、ツツバ語の記述的研究である。ツツバ語とは、南太平洋に位置する島嶼国ヴァヌアツ共和国の島の一つであるツツバ島の現地語であり、本論文においては、申請者が2001年から2006年の間に通算20ヶ月にわたって行った現地調査に基づき、音声・音韻、形態、統語の各側面からこの言語が詳細に記述されている。この言語の話者はこんにち最大に見積もってツツバ島の住民500人あまりと考えられ、島では日常的なコミュニケーションの手段として使用されているものの、文字はなく、また学校での教育や使用は行われていない。ツツバ語については、周辺言語の記述の中でわずかに言及されているほかには簡単な語彙調査が行われたことがある程度で、学術的な先行研究はなく、本論文はこの言語に関する最初の専門的かつ詳細な記述研究である。

本論文では、第1章でまずツツバ語の背景として、ヴァヌアツ共和国全体ならびにツツバ島の言語状況が説明され、また次章以降の詳細な記述に先立って、ツツバ語の全般的特徴すなわちこの言語がオーストロネシア語族に属し、SVOを基本語順とする主格・対格型の言語であることが述べられる。

第2章は音素と音韻を扱い、ここで申請者は、音素レパートリーとして5母音、15子音を挙げ、また基本音節はCV構造、アクセントはストレス型で、基本的に語末から二音節目の母音に置かれることを示している。ツツバ語において特に注目すべきは、世界でも報告例の少ない舌唇音(調音時に舌尖が上唇に接触する音)が存在することである。申請者はこの音の存在を調査中に確認し、音変化の背景を考察するとともに、若年層の言語ではすでに舌唇音がほぼ消滅している点を明らかにしている。

第3章および第4章は形態論的観点からの記述であり、そのうち第3章では、この言語の形態的特徴、形態素の種類、語形成の特徴が示される。ツツバ語にはさまざまな接辞があり、これらの付加によって、異なる品詞の語、あるいは自他の異なる動詞語彙が派生されるほか、名詞に所有や分配、前方照応などの意味が与えられる。また第4章では、この言語の品詞分類が示され、申請者は9品詞(名詞、動詞、形容詞、副詞、前置詞、接続詞、冠詞、間投詞、小詞)を定めている。

第5章は文の構造、また続く第6、7章はそれぞれ名詞、動詞についての詳述であり、これらの章においてツツバ語の単文の構造が解明される。以下にその主要な点をまとめる。ツツバ語の文法範疇には、人称、数、格、法、および動詞に現れる相、否定、義務がある。ツツバ語において名詞、動詞は語形変化をせず、上記の文法範疇は、代名詞接語もしくはその他の文法的な意味を表す接語を動詞や名詞に付加することで明示される。動詞には常に、主語の人称、数、法がひとつの形態素に融合した主語代名詞が前接語として現れる。文中の語は、基本語順であるSVOおよび一定の語順規則によって配列され、修飾関係は主要部-従属部の順序によって示される。所有関係は、所有物と所有者の緊密度に呼応した直接所有と間接所有の構造で示され、所有物と所有者の関係を示す四つの類別詞によって表される。また述語には、動詞や名詞などが一つだけ用いられる通常の述部タイプの他に、二つの動詞が連結辞を介さずに連続して一語のように機能する「動詞連続」とよばれる現象が見られる。これらは、先行する動詞のみに主語代名詞が付与される述語連続のタイプと、連続する動詞の双方

に主語代名詞が付与される述部連続のタイプに区別される。

第8章では形容詞、第9章では副詞、また第10章では前置詞が取り上げられる。形容詞は、オセアニア諸語において独立した品詞をなすか否かで問題となるカテゴリーであるとされるが、申請者は、これを独立した品詞と位置づけ、述語になる場合と、名詞の修飾語として働く場合を区別して記述している。述語になる場合には動詞と同じく主語代名詞が付加されて用いられる。副詞には、文全体を修飾するものと動詞を修飾するものが区別される。動詞修飾の副詞は動詞の後に現れるが、動詞が他動詞の場合には、他動詞とこれに後続する補語との間におかれるものと、補語の後におかれるものがあり、前者の場合、補語は動詞ではなく副詞の格支配を受け、本来は対格以外の格を支配する動詞の補語が、副詞の支配を受けて対格補語となるような現象が認められる。ツツバ語には7つの前置詞が認められ、これらは名詞句の前に置かれて方向、目的などの表現を形成する。

第11章は重文、第12章は複文についての記述である。重文とは、接続詞を介して二つの文が連結されるタイプであり、複文とは副詞節、関係節、補語節を伴う文である。補語節は、思考や発言の意味を表す動詞の補文となる節の意味であり、主節の動詞の種類によって補語節の法や相に制約が生じる場合があることが示される。

末尾に本論文で使用した語彙一覧と、現地の母語話者から採取した民話テキストが掲載されている。

論文審査の結果の要旨

本博士学位申請論文は、南太平洋に位置する島嶼国ヴァヌアツ共和国の島の一つであるツツバ島の現地語、ツツバ語の記述的研究である。本論文は、個別言語の研究としての価値、ならびに、言語学全般および関連諸研究分野に対する貢献という二つの面において評価される。

個別言語の研究の成果としては、まず、オセアニア諸語の研究への貢献が挙げられる。ツツバ語は、ヴァヌアツの他の言語とともにオーストロネシア語族のオセアニア諸語に属する言語であるが、これらの言語の系統関係や言語構造の実態には、まだ明らかにされていない部分が多々あり、未調査の言語も多く含まれる。オセアニア諸語の専門家であるオーストラリアのJ. Lynchはかねてからツツバ語の調査の必要性を指摘しており、本論文はその要請に答えるものとなっている。とくに、本論文ではツツバ語に舌尖と上唇を接触させて調音する「舌唇音」という珍しい音が存在することを明らかにしているが、この舌唇音はヴァヌアツの他の島でも確認されていることから、オセアニア諸語におけるこの音の分布、通時的な変化と消長の考察に重要な資料を提供するものと考えられる。

また本論文において詳細に記述されている文法構造の特徴、すなわち代名詞接語の用法や動詞の格支配の特徴、動詞連続のパターン、副詞によって変わる格支配などの現象は、言語類型論にきわめて興味深いデータを提供し、オーストロネシア語族の諸言語のみならず、さまざまなタイプの言語、ひいては日本語の文法構造を共時的、また通時的に考察するさいの比較資料となると考えられる。

言語学全般に対する貢献としてはまず、本論文が、過去に記述されたことのない言語を研究対象としている点が指摘される。すなわち、ツツバ語に関しては、これまで簡単な語彙調査がなされた以外に学術的研究はなされておらず、本論文によってはじめてその全貌が明らかにされたのであり、この点は言語学への大きな貢献として評価されるべきものといえる。

また、記述対象となっている言語は、話者の数が最大に見積もって500人ほどの極小言語である。この言語は、ツツバ島では住民によって今なお日常的なコミュニケーションの手段として使用されているものの、文字はなく、また学校での教育や使用も認められていない。ツツバ島は比較的近年まで、島外との交通を個人の手漕ぎボートという限られた手段に依存してきたために、外部との日常的な人的交流は限られていた。また島内には今も電気の設備がなくテレビもインターネットも使用できないため、外部からメディアを通じて情報が入ってくることもない。つまりツツバ島はこれまで、周囲との接触の機会に乏しく、その意味で現地語が比較的よく保持される環境にあったといえる。しかしながら近年、モーターボートの利用によって本土島との航行が容易になったこと、島外者と島の住民との結婚が増加したことなどから、ツツバ島でもヴァヌアツ共和国の公用語であるビスラマ語が浸透してきた。この傾向は、弱小言語が次第に大言語に押されてその社会的使用領域を狭め、いずれは消滅していく、いわゆる「言語シフト」の初期的兆候と見ることができる。グローバル化がさまざまな形で従来の地域社会の諸相を変える中で、弱小言語の消滅が不可避免的に生じている現代において、ツツバ語のように、ごく少

数の話者によって使用されている「危機言語」の調査と記述は、こんにちの言語学に与えられた重要な課題である。その意味でも、本論文は、大きな意義を持つと認められる。

さらに、本論文では、この言語における所有表現に、所有者と所有物との緊密度という文化的要素が反映されていること、移動や空間認識の表現が、島の地形や他の島との文化的力関係、貿易風の向きといった自然や文化環境の中で形成されてきたことなどを明らかにしているが、そういった言語事実は、言語がそれを取りまく自然や文化と密接な関係をもっていることを例示しており、文化人類学その他の関連諸研究分野への貢献にもなると見ることができる。

個々の形態や構文の分析においては、たとえば名詞に付加されて「照応」の意味を表すとされる接辞の機能の問題など、さらに考察すべき点が多くあることも事実である。また、本論文は記述的研究ではあるが、理論的研究の知見と照合させた時、ここに明らかにされた言語現象がどのように分析できるのかといった考察はなされておらず、申請者の今後の課題として残されたといえよう。

本論文は、上記の通り、さらに検討すべき課題を多々含んではいるが、それらを考慮に入れても、一つの、これまで世界の言語学にとって未知であった言語を詳細に記述した言語研究として高く評価されるべきものと考えられる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月9日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。